

しろつばき こがね

りゅうおか ちからいし

「白椿と黄金」

龍岡の力石のお話

むかし りゅうおか ちからいし

べっふなながし

ひと

昔、龍岡の力石というところに「別府某」という人がお

りました。

しょうじきもの はたらき

つく

正直者でよく働き、社会のためによく尽くした人で、

いう

おこなう

ぜんぶぶらく てほん

言うこと、行うこと、全部部落の手本でありました。

いちにち よう

おえ

ゆうべ いのり

ある日、一日の用を終えて、夕べの祈りとともに、静かに眠り

よる

しだい

むし こえ

につきました。夜も次第にふけて、虫の声もなくなったところ、その

まくらもと

かみさま

あらわれ

人の枕元に神様が現れ、

まえ

かみ おしえ

まもる

「お前は正直者であるから、神の教えをよく守るであろう。

かみ ちゃ

まつ

しろつばき

ね

こがね

のち

つかう

この上の茶せん松の白椿の根に黄金あり。三代後に使うべし。」

かみさま とおくさって

と言って、神様は遠く去ってしまいました。

よ あける

さがす

しろつばき さいて

夜が明けると、さっそくそこへ行って探すと、白椿が咲いているの

ね ほって

とおり

で、その根を掘ってみると、神様の言った通り、かめが出てきまし

べっふなながし

のち

ことば

たが、別府某は「三代後に使うべし。」との神様の言葉を

おもいだし も

かえ

かみだな

まつ

思い出し、持って帰って、神棚へ祭っておきました。

幾年かたち、二代目の人になりました。

ある日、旅の人が来て、

「神棚にある、そのかめを見せてくれ。」

と言うので、二代目の人は、かめを持ってきて見せると、旅人が、

「これは、わしが金に換えてやる。」

と言って、持ち去りました。

数日を経て、その旅人が、

「これはお金にならない。」

と言って返しに来ました。旅人が帰った後で、かめのふたを開けて

みると、中に入っていたものは、全部石ころになっていたのです

二代目の人は、神様の教えを守らなかったもので、とうとう神様

からもらった宝物を石にしてしまったのです。

かめは、大正の初めまで、中通りの井門春水さん宅にあったと

伝えられていましたが、その家もなくなり、かめも行方がわから

なくなっただいことです。